

2018年7月22日（日）「罪と赦し」

マタイ 18:21-35

21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」22 イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。

23 このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたいと思った。24 清算が始まると、まず一万タラントの借りのあるしもべが、王のところに連れて来られた。25 しかし、彼は返済することができなかったので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。26 それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。27 しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。

28 ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に出会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と言った。29 彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから』と言って頼んだ。30 しかし彼は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた。31 彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話した。32 そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。33 私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』34 こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。

35 あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。」

【序論】

「罪と赦し」の問題は人類にとって普遍的です。普通に一生を歩んで、「罪と赦し」の問題に直面することなく人生を終えられる人は、およそ一人もいないでしょう。私たちはまず、家族の関係において罪を犯し合います。親、兄弟から受ける心の傷。反対に自分が与えている傷もあるでしょう。そして、世の中に出た時に経験する、生まれも育ちも異なる人々から受ける攻撃、欺き、裏切り……。自分を含め、人は家庭で受けた傷を別の形で他人に与えていく傾向があります。この負の連鎖は人間社会を蝕み、人の心を歪め、全人類が復讐の執念の虜となっているのです。

人はどんなにか赦せるようになることを切望しているのでしょうか。それができれば人

生はどんなに楽であるか。たとえ赦しの決意をしても、自分が果たして本当にその人を赦せたのかどうか不確かであることを、自分自身が一番よく知っているでしょう。赦しの意志を表明しても、どこかに感情が残っている。忘れたような傷であっても、潜在意識の中に残っていることもあります。完全な赦しとは、いったいどの段階で言えるものなのか。まるで底なし沼のように、人の人生にまわりついているもの、それが「罪と赦し」の問題ではないでしょうか。

【本論】

今日は、兄弟の罪を何度まで赦すべきかと問うてきたペテロに対し、主イエスが無限の赦しを示されるという場面です。主は一つの譬話をもって、ペテロに赦しの真理を教えていかれる。この譬話はクリスチャンの心の二つの側面を見事に描いています。

本論 1. 七を七十倍するまで

そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」(18:21)

想像するところ、ペテロにとって誰か赦し難い相手がいたのでしょう。何度も何度もペテロを苛立たせるような相手です。いつの時代にあっても同じなんだと、少しホッとする気がいたします。

ここでペテロは、そのような相手を赦すべき限度はどこまでかを主イエスに問うている。「七度」という数は、主イエスが別の場面で言われたことが根拠になっているのかも知れません。

かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。(ルカ 17:4)

七度に及ぶ赦しというのは、当時のユダヤ人にとって大変寛大な態度でありました。多くのラビの伝承が、「三度まで」という基準を与えているからです。

ラビ・ヨセ・ベン・ユダは言った、人が罪を犯すと、一度彼をゆるす、二度目もゆるす、三度目もゆるす、四度目はゆるさない。それは、「神はこれらすべてのことを、二度も三度も人に行われ」(ヨブ33:29)、「イスラエルの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない」(アモス2:6)と言われているからである。

(『タルムード』 ヨーマー86b 注：モーセ律法を解釈した口伝伝承)

ペテロが主イエスに「七度」と提案したところには、彼の誇りを感じます。「俺はイエ

ス様の弟子として、他の人々とは一線を画す寛大な心を示そう」と。彼は「よく言った」と褒められることを期待したのではないのでしょうか。ところが。

イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」(18:22)

ペテロの誇り高き提案を払拭し、主は「七の七十倍」を示されました。これは本質的に「無限」を意味し、人間の底なしの復讐の執念に真っ向から立ち向かいます。創世記で最初の権力者となったレメクという人物は、敵に対する無限の復讐を誓いました。

さて、レメクはその妻たちに言った。「アダとツィラよ。私の声を聞け。レメクの妻たちよ。私の言うことに耳を傾けよ。私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した。カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍。」(創世記4:23-24)

「七十七倍」とはまさに「無限」を意味し、この言葉は墮落した人類史の行く末を示していると言えるかも知れません。神から離れた人間が作り上げてきた歴史は、まさしく血で血を洗う争いの歴史です。憎しみが憎しみを生み、それが幾世紀にも及んで争いのサイクルを築き上げていく。しかし、主は復讐の螺旋に終止符と打ち、ここに無限の赦しを宣言されたのです。今日の箇所の重要なポイントは、この赦しの真理は私たちの個人的な関係において適用されていくべきであるということです。先に学んだ、教会内における罪の処理には三段階における説得と、除名処分ということが規定されていました。しかし、個人の関係においては、赦しに制限はないということが言われている。そして、この無限の赦しは、たとえ相手が悔い改めていなくても、という意味なのです。

本論2. 一万タラントの免除〔第一の側面〕

さて、ここからいよいよ今日のメインの譬話に入ってまいります。この譬話は二つの場面で構成されており、主人公である一人の男の二つの側面を描いています。前提として、読者は「自分はいずれの心であるか」と問うのではなく、自分の内側にある二面性が描かれていると捉えて読む必要があるでしょう。

このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたいと思った。清算が始まると、まず一万タラントの借りのあるしもべが、王のところに連れて来られた。しかし、彼は返済することができなかったので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。(18:23-27)

ここでは、一人の王が自分のしもべたちを集め、貸していたお金を返してもらう状況が想定されています。これは靈的な領域では、神が世の終わりにすべての人間の人生を問う「最後の審判」をイメージさせるでしょう。

冒頭からとてつもない借金を持つ男が登場します。彼は「一万タラント」という巨額の借金をしているようです。「タラント」というのは当時の通貨の中の最高単位で、「一万」はギリシャ語の最高の数詞です。1タラントは6000デナリであり、1デナリが当時の労働者の一日分の労賃でありますから、現代の日本円に換算して6000億円ほどになります。ですが、これを文字通りに捉える必要はなく、返済不可能な負債であることを強調する表現に過ぎません。この一万タラントの借金を抱える男とは、特別な誰かなのではなく、実は神の御前にあるすべての人間を言い表しています。あなたも私も、神に対するとてつもない負債を生まれながらにして抱えている(罪の遺伝、腐敗の連鎖)。返しきれないほどの罪を負う存在であることが暗に示されているのです。

25節では「王」が「主人」に置き換えられているのですが、このところには王としもべの近い関係が表されているでしょう。人間が神に創られ、神との関わり抜きには生きられない存在であることが言い表されています。しかし、人間は主人である神の御旨を知らず、逆らい、いつの間にか巨額の負債を抱えたような立場に陥っているということです。

主人は、そのしもべに、自分を奴隷として売り、持ち物も家族も一切を売り払って返済するよう命じます。神はそんなことをしたとて、人間が罪の負債を償いきれないことを百も承知の上でそのように言われる。それに対し、そのしもべはどうかして返済すると、その場しのぎの言い逃れをします。できないことをすると言っているのです。これこそが「恵み」を知らない人間の姿ではないでしょうか。自分が神に対して罪を自力で償える存在だと思い込んでいる。そして、無限に払い続け、最終的には滅びに至ってしまう。この時に、もしこのしもべが「主よ、憐れみ給え」と言っていたら、ストーリーの展開はまた違ったのかも知れません。

この主人(神)はそのしもべを憐れみ、一方的な恵みによってすべての負債を免除にしてやります。このしもべが何かをしたわけではありません。ただ神の憐れみによって、そのような決断が下されたのです。恵みを受ける側は、予想だにしない展開に面食らってしまうでしょう。これで本当に赦されてしまうのか。自分の身に起きていることがよく分からないまま釈放されてしまう。これが、罪を赦された人の心理なのかも知れません。ところが、譬話の第二の場面は、その赦されたしもべの心の高ぶりを示しています。これは恐らく、このしもべが「赦しの福音」をよく理解していなかったことが原因でしょう。

本論 3. 百デナリへのこだわり [第二の側面]

ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に出会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と言った。彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから』と言って頼んだ。しかし彼は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた。彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話した。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。(18:28-34)

一万タラントの借金を免除されたしもべが次に取った行動に注目しましょう。彼は何と、自分のしもべ仲間(同じ主人の下で働いている仲間)を探し出し、彼に貸していた金の返済を迫ったのです。「出会った」という言葉は、直訳すると「見つけた」で、偶然出会ったというよりも、あちこち探して見つけ出したというニュアンスです。自分の問題に押し潰されそうな時、人は他人の問題にすら気づかなくなるのでしょうか。しかし、自分の問題が解決し、心に隙ができた時、途端に他人の問題が見え始める。そして、その仲間のしもべの首を絞め、殺さんばかりの勢いで返済を迫るのです。

百デナリとは、100日分の労賃であり、現代の日本円にして100万円程度と捉えておけばよいでしょう。これは返せない額ではありません。こつこつと働いて返していけば、いつかは返し切ることのできる金額です。しかし、彼はその借金を赦さず、牢にぶち込むという仕打ちをしてしまいました。

この譬の重要なポイントはここにあります。人間とは、自分の巨大な罪が赦されたとしても、他人の罪を赦すことができないのです。これは私たちの姿そのものではないでしょうか。私たちはイエス・キリストを信じ、この人生全体で犯した(犯す)一切の罪が赦されました。私たちの神に対する関係は、今や一万タラントの借金を免除されたしもべに相当します。肩の荷は降ろされ、身軽になって神と共に歩み始めたのです。ところが、私たちはいざ隣人とふれ合う時、赦し難い問題を目の当たりにします。その問題は私たちにとって決して小さなものではありません。

さて、ここで私たちの内側で起きていることとは何でしょうか。他人の罪の大きさ自体は変わることがありません。違いがあるのは、私たち自身の中にある、罪を見る基準なのです。もし私たちが、一万タラントの罪を赦してくださった神の恵みを基準に、100デナリの罪を見たとする、それは何でもないものとなるでしょう。しかし、もし私たちが「罪は赦されないものだ」という基準をもって同じ100デナリを見たとしたら、そ

れはまことに大きなものとして私たちの前に立ちはだかります。つまり、その人が罪の赦しを本当に知っているかどうか、隣人の罪を大きいと見るか、小さいと見るかの基準となるのです。これは試金石として、私たちが本当に「神の赦し」を知っているかどうか、いえ、真に赦された者であるかどうかを探ってきます。

私たちは今一度、自分自身の心を見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。隣人を赦さなかった「悪いしもべ」に対する主人の取り扱いは、「獄吏に引き渡す」ということですが、文字通りには「拷問にかけられる者たち」に引き渡したという意味になります。罪を処理せぬままに人生を終えた者の永遠の行き先を婉曲的に表現していると思われるます。

【展開】

さて、最後に 35 節で結論として言われている「**あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです**」という言葉に注目しましょう。「心から」という表現は重いですね。私たちは言葉の上では「あいつを赦した」と言っているかも知れませんが、「心から」できているかと問われると、不安になります。もし「赦し」という事柄が、人の感情に基づくものであるとしたら、誰一人として赦しを貫徹することはできないでしょう。赦しとは意志であり、沸々と湧き出る感情に戦いを挑むものであります。これは私の「赦し」理解ではありますが、キリスト者とは人生の終わりまで赦しの決意をし続ける存在ではないのでしょうか。たとえ感情的に抑え難いものがあっても、神の助けを得ながら、決意を続けるのです。これが悪魔に対する勝利です。極論ではありますが、感情が収まらなかったとしても、赦し続けることはできる。そういう存在とされているのです。

しかし、そうは言いましても、私たちは感情的にも楽になりたいというのが本当のところではないのでしょうか。脳科学によりますと、心の傷は自分の中で隠し、埋めてしまうのではなく、できるだけ言葉で表現することによって、記憶がだんだんと薄らいでくるそうです。私たちが神の御前に自分の傷を広げるとき、神はそこに癒しを与えてくださるでしょう。時には、クリスチャンの良いカウンセラーに話を聞いていただくことも、意味があると思われれます。

【結論】

まず、私たちの内には本来「無限の赦し」などというものは存在しないということ

認めたい。「罪と赦し」というものは、小さな人間の心の問題でありながら、無限の領域を持っています。つまり、これは神の領域であり、神にしか解決することができないのです。しかし、神が私たちの内におられるのであれば、私たちは永遠とも思える「罪と赦し」の問題に立ち向かうことができるでしょう。神が私たちの内側で生きて働き、尽きぬ泉となって、私たちに不可能な赦しの問題を取り扱ってくださるからです。

【祈り】

すべてにおいて限りなき神よ。私たち有限なる人間には、人を無限に赦し続けるなどということは本来できません。一人一人が問題を抱え、自分自身と戦っています。私たちが人を赦せたとしたら、それはただただあなたが私たちの内におられるからにほかなりません。主よ、私たちの内に住み、尽きぬ泉となって、私たちの無限の罪を赦し、また私たちが隣人を赦し続けることのできる者とさせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

一万タラントの負債をも、恵みによって免除し給う、父なる神の愛。

人の「赦し」に無限の領域を与え、地上の個々の問題に取り組ませ給う、主イエス・キリストの恵み。

尽きぬ赦しの決意を与えるとともに、心の癒しをも豊かに与え給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。